MESA/BOOGIE®

TRANSATLANTIC™ TA-30™

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

MESA/Boogieのアンプを選択されたあなたは、とても賢明なプレーヤーであり、且つ、直感力に優れた方です。それと同時に、アンプ・メーカーとしての我々に、絶大なる信頼を頂いているという事ですね。我々は、その期待を重く受け止めています。このアンプを選択して購入されたという事は、このアンプがあなたの音楽を表現する体の一部になったという事であり、同時に、あなたはメサ・ファミリーの一員になったのです。メサ・ファミリーへようこそ！我々の目指すゴールは、決してあなたを幻滅させる事はありません。偉大なアンプのオーナーになった今、メサの先人達が築き上げてきた様々な真空管アンプの伝統、そしてその上に新たに積み上げられた技術の全てを、あなたは享受出来るのです。これから、このアンプがあなたの音楽制作を触発し、多くの喜びを与えてくれる事は間違いありません。それは、これまで培ってきたあなたの奥底に眠る音楽に対する意欲や情熱を導きだす事であり、我々はその手助けが出来ればと願っています。...私達の新たなる友へ捧げます。

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従って設置して下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは２つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプロスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

TRANSATLANTIC™

目次

使用上のご注意 0
概要 1-2
役立つヒント 2-3

フロントパネル： コントロールと特性

モード: ノーマル、トップ・ブースト 3-4
モード: ツイード、HI 1、HI 2 4-5
パワー・モード: MULTI-WATT™ POWER（マルチ・ワット・パワー） 5-6
インプット 7
フット・スイッチ 7
ボリューム / ゲイン 7-8
ゲイン / プル・ブースト 8
トレブル 8-9
バス 9
リバーブ 9
FX & リバーブ / バイパス 10-11
カット / プル・マスター 11
チャンネル選択 12
マスター: チャンネル2 12
電源スイッチとスタンバイ 12

バックパネル：

電源ソケット 13
ヒューズ 13
センド / リターン 13
スピーカー 14

サンプル設定・ユーザ設定テンプレート 15-18
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド 19-24
真空管の詳細 25
パーツ・シート 26

取扱説明書

概要:

TA-30のコントローラーのレイアウトは、他のMESAアンプに比べてシンプルですが、見かけによらず内部構造は複雑です。当製品はコンパクトですが、機能性を重視しています。TA-30は、サイズが小さいにもかかわらず、他の大出力アンプと同じ機能を持っています。

TA-30には、２つのチャンネルがあり、チャンネル１はイギリス系のサウンド、チャンネル２はアメリカ系とイギリス系、両方のサウンドが出せます。

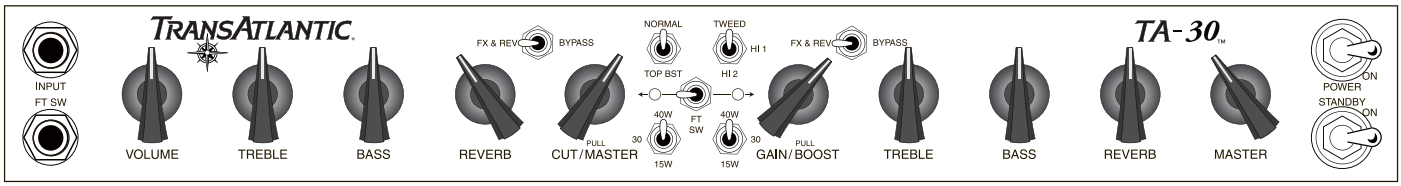
チャンネル１には、VOX系アンプのモードが２種類あります。NORMAL（ノーマル）モードは、低ゲインでヘッドルームが大きいクリーン・サウンドです。TOP BOOST（トップ・ブースト）モードは、イギリスのポップスでよく使われるクリップ・リズム・サウンドとリード・サウンドです。

チャンネル２にはモードが３種類あります。TWEED（ツイード）は、南カリフォルニアのアンプのようなクリーンな音で、NORMAL（ノーマル）より低域が豊かで、クリップさせると綺麗に歪みます。HI 1はイギリス系のサウンドで、ゲインが低く設定されていると、ざらついたリズム・ギター・サウンドになります。ゲインを上げるにつれてアタックが強くなり、歪んだリード・サウンドも作れます。HI 2は、カリフォルニアの有名な高ゲインのブギー・リード・サウンドが特徴です。低域も強く、アタックの周波数が強調されて音が太くなり、ソロ・サウンドに最適です。

TA-30のチャンネル2には新しいGAIN BOOST（ゲイン・ブースト）機能が追加されて、チャンネル2の全てのモードにゲインを上げることが可能になりました。得にHI1とHI2モードで激しいロックとメタルサウンドを実現できます。

これらのプリアンプ・モード設定の他に、Multi-Watt™（マルチ・ワット）パワー設定で音色の微調整ができます。Multi-Watt™（マルチ・ワット）では３種類のパワー・モードから選択出来ます。更にフット・スイッチを使用する事で、２つのチャンネルの切り替えが出来ます。

フロントパネル: *TRANSATLANTIC TA-30*



バックパネル: *TRANSATLANTIC TA-30 Combo*

バックパネル: *TRANSATLANTIC TA-30 Head*

概要（続き）：

Multi-Watt™（マルチ・ワット）パワー・モードを15Wに設定すると、クラシックな15ワットのClass Aの音質が得られます。クリップさせて歪ませることもできますし、低音量でもウォームで倍音豊かな音が作れます。

Multi-Watt™（マルチ・ワット）パワー・モードを30Wに設定すると、Class Aのままで二つの真空管が回路に追加され、ビンテージなサウンドでありながら、使いやすいパワーとスムーズなクリップ・サウンドになります。

弊社が特許を持っているDyna-Watt™パワーの40Wに設定すると、一気に音が強くなります。パワーアンプがClass ABになり、ヘッドルームも40Wアンプと思えないほど大きくなります。アタックの瞬間にパワーが蓄積され、それがギターの演奏に合わせて徐々に放出されるので、小さなアンプにも関わらずパンチのあるタイトなサウンドになるのです。

ハードバイパス式のシリーズ・エフェクト・ループに外部エフェクター（ラックマウントやペダル・タイプ・エフェクター）が接続可能です。得にギターとアンプの間に接続した場合音が崩れ易いディレイやコーラスなど空間エフェクター類ご使用の際、エフェクト・ループに接続するのをお勧めします。

この充実した機能と、シンプルなゲインとトーン・コントロールを合わせたのがこの馴染みやすく使いやすいTransAtlantic（トランス・アトランティック） TA-30です。いかなる場所で演奏をしていても、これらのクラシックなアンプの音に自分だけのテイストを加える事が出来ます。

役立つヒント：

1. AC電源ケーブルを裏のチューブ・カバーから外して、アースのあるACコンセントに挿して下さい。

2. TSフォーン端子のフット・スイッチとフロント・パネルのTSフォーン・ジャックを同梱のステレオ・ケーブルで接続して下さい。

3. アンプと最低１台のスピーカーを、あなたが立っている（あるいは座っている）床の上に直接置いて下さい。これで、カップリング・サークルが完成します。こうすることで、手からギター、ギターからアンプ、アンプからギター、ギターから手という共振ループが出来上がるため、気持ちよく演奏出来るだけでなく、アンプの音が良くなります。

4. フットスイッチでモード切り替えの為にチャンネル設定を行う時に、コントローラーを11時～2時に設定するのをお勧めします。そうすると切り替えの際にトーンとボリュームの一番良いバランスをとれます。

5. パワーをONにセットして、30秒ほど待ってからSTANDBYをONにして下さい。電源を入れて、（特に長い時間使っていない場合）パワー管をウォームアップさせて下さい。STANDBYをONにしてから演奏して下さい。

6. フロント・パネルほぼ中央の「FT SW」と表示されている小さなトグル・スイッチで、チャンネルの切り替えが行えます。左でチャンネル１になり、右でチャンネル２になります。フットスイッチを使用する場合は、「FT SW」のトグル・スイッチを真ん中のポジションにして、フット・スイッチをフロント・パネルの左下のFT SWジャックに接続して下さい。

7. たいていの場合、GAIN（ゲイン）を上げたらBASS（バス）を下げて下さい。そうすることで、低域が乱れることなく、アタックがクリアーなサウンドになります。チャンネル1のTOP BOOST（トップ・ブースト）モードとチャンネル２のTWEED（ツイード）モードの時は特にそうです。

8. チャンネル１のCUT（カット）コントロールには、PULL MASTER（プル・マスター）機能が付いています。このつまみが押されていると、CUT（カット）コントロールとして動作し、引かれているとマスター・ボリュームとして動作します。マスター・ボリュームとして動作している時、CUTコントロールは高域のフィルターが少しかかったサウンドになります。

役立つヒント（続き）：

9. 片方のチャンネルだけが15Wパワー設定されていると、スイッチを押した時のポップノイズが若干大きくなります。これは高い電圧から低い電圧へ急激に変化するために起こります。（両チャンネルを15Wモードで使うとこのポップノイズは生じません）ポップノイズを避けるためには、フット・スイッチを使う予定のあるライブでは、なるべく30Wと40Wモードを使用すると良いでしょう。

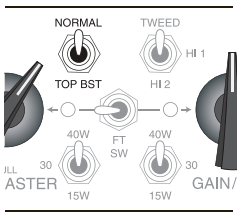
10. CLASS A回路によって、チャンネル1を30Wパワーモードでご使用の際、TOP BOOSTとNORMALモードでもバックグラウンド・ハムが若干大きくなります。

これでTA-30の基本的な機能の説明は終わりです。これより各モードとコントローラーの詳細説明に入ります。

モード：

チャンネル1：

ノーマル：



このモードは、TOP BOOST（トップ・ブースト）回路の構成からゲインを省き、ブライトネスを加えて、ボトムを厚くする事により、音に空気感と深みを与えます。このモードはTOP BOOST（トップ・ブースト）よりもヘッド・ルームが大きいので、クリーンなサウンドが欲しい時に向いています。他の楽器とミックスした時に、より馴染むクリーン・サウンドが必要な時はNORMAL（ノーマル）を選択すると良いでしょう。反対に、荒削りな音にするにはゲインが充分ではありませんし、出力の小さなピックアップを使用してブライトネスをかけたとしても耳障りな音になるだけなので、オーバー・ドライブやクリップしたリズム・サウンドが欲しい場合は、このモードはあまりお勧め出来ません。

トップ・ブースト：

このモードには、伝統的なイギリスのアンプVOX に対する尊敬の念が込もっています。TOP BOOST（トップ・ブースト）回路は、この２０年間、無数のカスタム・アンプに使用され、クラシック・ロック・ギター分野の中心的存在であり続けています。我々は、その歴史を踏まえた上で、敢えてこの回路を採用し、さらに高見を目指す決心をしたのです…特徴的なサウンドは踏襲しつつ、決してただの真似にはならない様に。その精神は、我が社が特許を持つ、マルチ・ワット・チャンネル・アサイナブル・パワーや、４０年以上に渡って我が社がアンプを設計してきた中で発掘してきた"秘密の箱"に現れています。他社には真似の出来ないこの新しいサウンドを満喫出来るのは、 このアンプを手にした、あなただけなのです。そして、そんなアンプを提供出来る事に、心から喜びを感じています。

TOP BOOST（トップ・ブースト）は、ざらついたサウンドから、きめ細かいフル・ディストーション・サウンドまで、あらゆる面で優れているのですが、クリップ寸前のサウンドは特筆に値すると言えるでしょう。ピッキングによるサウンド変化の滑らかさと幅の広さは、他の追随を許しません。

マルチ・ワット・パワー・スイッチを切り替える事で、クリップ寸前のヘッド・ルームに幅を持たせる事が出来ます。その結果、倍音成分やボリュームをコントロール出来るようになり、それが、サウンド・カラーのバリエーションを増やす事に繋がるのです。最も伝統的なセッティングは15Wと30Wです。これがボリュームとクリップのバランスの基本的な関係になります。VOXのAC 15やAC30を使用した事のある人なら、ピッキングに対するクリップ・レスポンスが驚く程似ている事にお気づきのはずです。15Wと30Wパワー・モードでTOP BOOST（トップ・ブースト）にすると、クリーン・サウンドからディストーション・サウンドまで幅広いサウンドを、高次倍音を損なう事無く、ギターのボリュームでコントロールする事が出来ます。

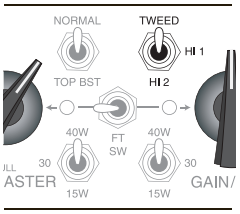
モード（続き）：

15Wパワー・モードにすると、高次倍音が心地よくブレンドされたサウンドになり、低いボリュームからクリップが始まります。15Wパワー・モードの時は、GAIN（ゲイン）とBASS（バス）の両方が高いレベルにならない様に注意して下さい。15Wパワー・モードの時に、GAIN（ゲイン）を高くしたら、BASS（バス）は１０時の方向以下にして下さい。低域のレスポンスを上げたいなら、むしろBASS（バス）はオフにした方が良いでしょう。40W パワー・モード（ダイナ・ワット）を使用する時は、15Wパワー・モードや30Wパワー・モードの時よりも、GAIN（ゲイン）とBASS（バス）を高めに設定する事が出来ます。40W パワー・モードでTOP BOOST（トップ・ブースト）を使用する場合は、クリーン・サウンドならGAIN（ゲイン）を１０時以下、ヘヴィー・サウンドでボトム・エンドにタイトさとパーカッシブな感じを求めるならGAIN（ゲイン）を３時以上に設定すると良いでしょう。この設定にしておくと、中高域のアクセントの付け方でサウンド・カラーを変える事が出来ます。

チャンネル2：

ツイード：

このモードは、チャンネル 2の３つのモードの中で、最もゲインが少ないので、クリーンでクリップ寸前のサウンドに向いています。回路の構成は南カリフォルニアのメーカーの初期のツイード・アンプを基本にしていますが、４０年以上に渡って我が社がアンプを設計してきた中で発掘してきた"秘密"もちりばめられています。



30Wパワー・モードや40W パワー・モード（ダイナ・ワット）でTWEED（ツイード）を使用してクリーン・サウンドを出すと、きらびやかで暖かみのあるヘッド・ルームが大きいサウンドを得られます。40W パワー・モード（ダイナ・ワット）は、ライブ・パフォーマンスで実力を発揮します。TWEED（ツイード）モードで柔らかいクリップ・サウンドを奏でるには、GAIN（ゲイン）を高め（３時から５時半）、BASS（バス）を低め（８時から１０時半）に設定して、15Wパワー・モードと30Wパワー・モードを切り替えながら、求めるレスポンスになるまで微調整を繰り返して下さい。

特にTWEED（ツイード）モードやNORMAL（ノーマル）モードでオーバードライブ・サウンドにする時は、GAIN（ゲイン）を高めにしたら、BASS（バス）を低めに設定して下さい。これにより、アタックがタイトで輪郭のくっきりしたサウンドにする事が出来ます。

HI1： 再び海を渡って、偉大なイギリスのハイ・ゲイン・アンプに敬意を表する事に致しましょう。HI 1 は、タイトなアタック、大音量、タイトなボトム、そして中域をカットしたサウンド等で有名なアンプを全て網羅しています。HI 1は、アタックが速く、ボトムのレスポンスに優れたサウンドが欲しい時に最適です。

多くのギタリストは、この回路に荒々しいオーバードライブのリズミックなギター・サウンドを求めますが、パーカッシブなフレーズにも向いています。中低域が特徴的なショート・スケールのマホガニー・ボディーのギターが輝きを増します。

HI 1モードでシングル・ノート（単音）のソロ・サウンドを出したい時は、ハイ・ゲインでコードを弾いている時よりもTREBLE（トレブル）を低めに設定すると良いでしょう。つまみの位置を９時半から１０時半位にすると、アタックが柔らかくなって音の繋がりが滑らかになり、歌を歌っている様になります。HI 1モードでゲインを低く設定している場合は、コードであれソロであれBASS（バス）を幾分高め（１時半から３時半）に設定すると、音に空気感と厚みを加える事が出来ます。一般的に、HI 1でBASS（バス）を加えると、他のモードでBASS（バス）を加えるよりも、ふくよかなサウンドになります。それは、HI 1が元々中高域の豊かなサウンドである事に加えて、BASS（バス）の周波数がHI 2よりも若干高めに設定されている事によるものです。そのため、アタックが少し柔らかいサウンドになります。

パワー・マッチングに関しては、HI 1では３種類どのモードとも良好です。スムーズなソロ・サウンド等、イギリスのクラシックなレスポンスを求めるのであれば、30Wパワー・モード、タイトでパーカッシブなコードを弾くのであれば、40Wパワー・モード（ダイナ・ワット）が特に相性抜群です。15Wパワー・モードでは、低から中程度のゲインでのソロ・サウンドは良いのですが、タイトでパーカッシブなリズミック・ギター・サウンドとなると、高出力モードほどの期待は持てません。

モード（続き）：

HI2： スーツケースを片手に、再び世界のクラシック・ギター・サウンドを求める旅に出ましょう。今度は大西洋を渡って、ワインとハイ・ゲイン・ギター・サウンドで有名なカリフォルニア州ソノマを尋ねます。HI 2は Boogie（ブギー）そのものです。スムーズでアタックが柔らかく、サステインの効いた、倍音成分が豊かなサウンドは、ソロ・サウンドにぴったりです。コード・サウンドも良いのですが、やはり深い低域、他の楽器との馴染みが良い中域、そして高次倍音を豊かに含んだ高域といった、シングル・ノート（単音）のソロ・サウンドで真価を発揮します。

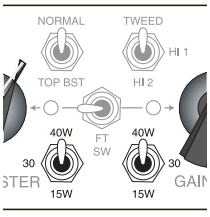
しかし開発中には TransAtlantic（トランス・アトランティック）内部でも音作りの方向性について、迷いがありました。他の Boogie（ブギー）のリード・モードよりも、中域と低域の周波数設定が少し高い理由は主に 2 つあります。1 つ目は、高出力のパワー・アンプと比べて、低出力のパワー・アンプでは超低周波数のコントロールが困難であるということ。低音域にパワーを取られてしまい、サウンド全体の鮮明度が落ちてしまうのです。2 つ目は、ギタリストの多くがアンプの音質に関して保守的であるという事です。同じ音楽を聴いて育ったギタリスト達は、伝統的なギター・サウンドを求める傾向にあるようです。我々は長い間、アンプのサウンド・カラーやモード選択に迷い、基本から外れて行くギタリスト達を見てきました。そんな理由から、アンプの設定は、シンプルでわかり易いものにするべきという結論に至ったのです。

HI 2には、Boogie（ブギー）のハイ・ゲイン・モードに求められる全てが凝縮されていますし、HI 1には、イギリスのクラシック・ロック・ギター・サウンドのすべてが詰め込まれています。後はわかり易いつまみで微調整をするだけです。

また、HI 2は、3種類のパワー・モードどれを取っても相性抜群です。押し出しが強くてダイナミックなサウンドが欲しいなら、40W を選択すると良いでしょう。瑞々しく高次倍音を豊富に含んだサウンドなら30W、そして、真空管オーバードライブ・サウンドを小音量でならして録音するとき等は、15W パワー・モードを選択すると効果的です。15W パワー・モードでゲイン-を低めに設定したソロ・サウンドは、特にスタジオ・ワークで威力を発揮します。15W パワー・モードに於いて、低めのゲインで最高のブルース・サウンドを引き出す設定は、GAIN（ゲイン）を１０時から１１時にして、MASTER（マスター）を上げ目にして下さい。アタックをつぶさないためには、BASS（バス）を絞った方が良いのですが、プリアンプでゲインを得るときと倍音成分が異なるので、サウンドの印象も変わってきます。

パワー・モード：マルチ・ワット」・パワー

TransAtlantic TA-30は、5 種類の異なる回路で構成された、まさにプリアンプ・サウンドの宝庫です。我々はいつも“プリアンプ50% パワーアンプ 50%”と言っています。どのアンプでも、レスポンス、サウンド・カラー、フィーリングと言ったものは、パワーアンプによる所が大きいのですが、TA-15では、プリアンプがパワーアンプと同じ位の重要度を持っています。



弊社が特許を持っているMulti-Watt™ Power（マルチ・ワット・パワー）は、モードの切り替えだけでなく、組み合わせの選択も可能です。TA-15は、3 種類の異なるパワー・モードを備えています。各モードにはそれぞれ独特なキャラクターとフィーリングがあり、さらにチャンネルが独立しており、プリアンプのサウンドを自分で微調整する事も出来ます。15Wパワー・モードと30Wパワー・モードは、懐かしのパワーアンプ・サウンドで、それぞれ独特のサウンド・カラーとレスポンスを持っています。また、もう一つの特許、40W Dyna-Watt™（ダイナ・ワット）パワー・モードを含む、2 つの年代物の逸品を密かに用意しています。

Dyna-Watt™（ダイナ・ワット）は、弊社がSTUDIO 22コンボを世に送り出した1986年に、低出力の MESA（メサ）アンプに搭載され始めました。弾けるアタック音とそのパワーに人々が衝撃を受けて以来、弊社ではDyna-Watt™（ダイナ・ワット）を使い続けています。Dyna-Watt™（ダイナ・ワット）は、弾けるエネルギーを溜め込んでから一定のカーブで放出する事により、大きなアンプでしか得られなかった太くてパンチのあるサウンドを、軽量でクリップ能力の低い低出力のアンプで実現したのです。Dyna-Watt™（ダイナ・ワット）により、TransAtlantic（トランス・アトランティック）は、小型のレコーディング用、あるいは練習用のアンプだけでなく、レコーディング・スタジオで使用されるアンプや、中型のパフォーマンス・アンプに至る様々なスタイルのアンプを製造するメーカーへと発展を遂げる事になったのです。

クリーンサウンドを得るには40Wモードでチャンネル2のTWEEDセッティング、タイトなクランチサウンドを得るにはHI1のセッティングをお勧めします。Dyna-Watt™のヘッドルームと早いレスポンスはこういうサウンドに最適です。

モード（続き）：

15 ワット:

このセッティングでパワー管4本の内2本が利用されて、CLASS A回路でビンテージ風なクリッピングが得られます。歪み系のサウンドになる前のソフトクリッピングは柔らかいクランチのコード・プレイやスムーズなシングル・ノートフレーズに最適です。チャンネル1の両モードとチャンネル2のTWEEDモードでこのパワーモード設定をお勧めします。

30ワット:

15Wモードと同じく、CLASS A回路を利用していますが、4本のパワー管でもっとタイトなブリティッシュ系のサウンドを実現しています。伝説的なAC30に敬意を表したモードでありながら、このパワー設定で全てのチャンネルモードに素晴らしいビンテージ・サウンドが得られます。更に、チャンネル2の"アメリカ風"の音色で、30W設定きっと自分のシグネチャー・サウンド見つかれます。

是非、30Wパワーセッティングで Channel1の両モードのクランチ・リズム・サウンドとTOP BOOSTモードのソロ・サウンドを試してみてください。チャンネル2のTWEEDモードでも良いクランチ・リズム・サウンドが得られます。HI1とHI2に設定した際、ハイ・ボリュームでプリアンプ・ゲインと出力管のクリッピングのバランスがありソロ・サウンドに最適です。

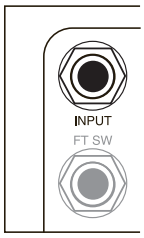
40ワット:

このパワー・モードの全ては"パンチ"です。Dyna-Watt™ （ダイナ・ワット）は、弾けるエネルギーを溜め込んでから一定のカーブで放出する事により、大きなアンプでしか得られなかった太くてパンチのあるサウンドを、軽量でクリップ能力の低い低出力のアンプで実現したのです。40Wで大きなヘッドルームがありますのでクリーンのリズム・サウンド、得にカッティングには最適です。もちろん、クランチやオーバードライブ系のサウンド作りにもばっちりです。

40Wでタイトなトラッキングを実現していますので、NORMALとTWEEDモードのクリーンサウンドにパンチとヘッドルームを追加され、HI1とHI2のハイ・ゲイン・サウンドにアグレッシブな中音が追加されます。

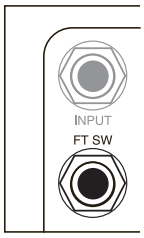
フロントパネル: コントロールと特性:

インプット:



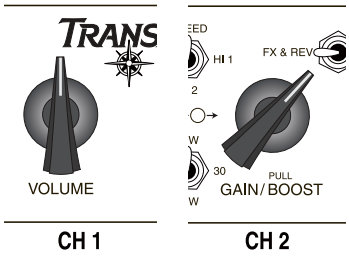
これはギターを接続する入力ジャックです。このジャックからプリアンプ、そしてTransAtlantic（トランス・アトランティック）のハイ・ゲイン・アンプへと入力されていきます。接続するシールドは、高品質のケーブルを使用して下さい。高品質のケーブルを使用する事は、ノイズを防止する事に繋がります。

フットスイッチ:



この1/4"ステレオ・ジャックは、チャンネル選択をフット・スイッチで行うための端子です。ここにフット・スイッチを接続すると、そのフット・スイッチでチャンネル切り替えを行う事が出来ます。

ボリューム / ゲイン:



このつまみは、チャンネルやモードに関わらず、プリアンプの入力レベルを調整します。これにより真空管のドライブ量や音声信号の飽和度合いをコントロールする事が出来ます。このつまみは、Channel 1（チャンネル1）ではVOLUME（ボリューム）、Channel 2（チャンネル2）ではGAIN（ゲイン）と呼びますが、機能は全く同じです。モードによって回路内での位置は変わりますが、機能そのものは同じです。このつまみで、アタックの感じやヘッドルームを調整し、クリーンなサウンドからディストーション・サウンドまで様々なサウンドを作り出すのです。プリアンプの入力という意味ではゲインという単語を用いていますが、Channel 1（チャンネル1）ではそれをVOLUME（ボリューム）と呼んでいます。

GAIN（ゲイン）の設定により高次倍音の量をコントロールする事が出来ます。一般的に、低い設定にすると高次倍音が通過し、GAIN（ゲイン）を上げるにつれて真空管の飽和の度合いが高まり、こもった丸い音になっていきます。この特徴を覚えておくと、サウンド作りに生かせるでしょう。実際、低ゲインのクリーン・サウンドは、豊富な倍音成分を含んでおり、高ゲインのリード・サウンドは圧縮されて、暖かみのあるボーカルに近い倍音構成になります。

TA-30は本来、出力が低いアンプですので、ゲイン・コントロールとパワー・モードの選択による巧みな調整で、ここまでのサウンドを作り出しているのです。100 watt（ワット）もあるようなアンプとは異なり、TA-30は、オーバードライブとソフト・クリップ・サウンドで他の楽器に埋もれない存在感を示しています。アタック音が損なわれる事無く、サウンドのダイナミクスを保ち続けられる事が、TA-30の大きな魅力になっています。

重要！TA-30のベスト・サウンドは、GAIN（ゲイン）コントロールを中位（１１時から２時）にする事で得られます。この範囲であれば、演奏のニュアンスがより表現出来るので、これを基本に音作りのレジュメを構築すると良いでしょう。GAIN（ゲイン）コントロールを１１時から２時よりも高い値に設定すると、プリアンプとパワーアンプのバランスを取るのが難しくなります。

フロントパネル: コントロールと特性（続き）:

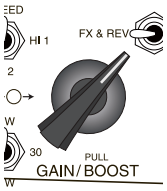
どうしてもGAIN（ゲイン）コントロールを高くしてハイ・ゲインのヘヴィーなサウンドが欲しい場合は、40Wパワー・モードにしてください。このモードにすれば、低音のタイトさを失わずに済みます。しかし、100 watt（ワット）アンプのようなレスポンスは期待しないで下さい。TA-30 はこのクラスでは万能タイプですが、ミニチュア管のEL84では、大出力の6L6やEL34等のパワー管とは違い、大きなプリアンプ・ゲインや低音を扱う事は出来ません。15Wパワー・モードや30Wパワー・モードでゲイン・コントロールを高めに設定すると、アタック音がぼけてしまいます。演奏に熱が入ってくるとなおさらです。

メモ - CHANNEL 1（チャンネル1）: チャンネル1では、VOLUME（ボリューム）コントロールを、GAIN（ゲイン）コントロールとギターのボリューム、あるいは “master（マスター）”コントロールで行います。オリジナルのアンプにはマスター・ボリュームが無かった事に敬意を表して、チャンネル1ではVOLUME（ボリューム）コントロールで音量の調整を行い、歪みを加えるのはギターのボリュームで行います。“no master”（マスターなし）にこだわる人達は、素早いレスポンスや明晰度、そしてピッキングに対する感度等が優れている事を大切にしているわけですが、その一方で、サウンド作りに柔軟性を求める人も多くいるのです。
そこで、我々は新しい機能を持った回路を設計し、レスポンスを大切にした伝統的な“no master”（マスターなし）と、ゲインとボリューム両方を使用するタイプを選択出来る様にしたのです。

例えば、ゲインとギターのボリュームで飽和の度合いをコントロールしていて、音量を変更したくなったら、CUT（カット）/ MASTER（マスター）つまみを引けば同じつまみがMASTER（マスター）ボリュームに早変わりです。
CUT（カット）/ MASTER（マスター）コントロールを再び押すとカット・コントロールに戻ります。カット・コントロールは、つまみを右に回す事により高音域が減衰していきます（プレゼンス・コントロールと反対の効果です）。つまみを引くと、マスター・ボリュームの機能を果たします。

NORMAL（ノーマル）モード、TOP BOOST（トップ・ブースト）モード共に、伝統的なものから最先端のものまで幅広く柔軟性に富んでいます。さらに、バラエティーに富んだサウンド・カラーを作り出すつまみからフットスイッチを使用した機能までをご紹介します。

チャンネル2：ゲイン / プル・ブースト



TA-30のチャンネル2には新しいGAIN BOOST（ゲイン・ブースト）機能が追加されて、チャンネル2の全てのモードにゲインを上げることが可能になりました。得にHI1とHI2モードで激しいロックとメタルサウンドを実現でき、TWEEDモードでは低めのゲイン・ブーストになります。

アタック感を保つためにGAIN BOOSTをONにする時にBASS（バス）の調整が必要です。一般的なルールとして、ゲインを上げるほどバスを下がるのはお勧めします。

TREBLE（トレブル）:

この機能は、プリアンプの中で２番目に強力なコントロールであり、操作は至ってシンプル。音を聞きながら、ただつまみを回せば良いのです。TREBLE（トレブル）は、プリアンプで音声信号の高音域をどのくらい強調するかを調整します。これは、トーンとノイズのバランスを調整する事にもなります。TREBLE（トレブル）を上げ過ぎる（３時から５時半）と、ノイズ（ヒス・ノイズ）が目立ってしまいますので、あまり上げ過ぎない様に注意して下さい。

GAIN（ゲイン）同様、TREBLE（トレブル）も中位を基本として調整すると良いでしょう。CHANNEL 1（チャンネル1）で、音色を明るくしたいときは、CUT（カット）コントロールを７時から９時位に設定して下さい。相当高い音域だけがカットされてパワーアンプ・セクションに入力される事になるので、ノイズが少なくなる可能性があります。

フロントパネル: コントロールと特性（続き）:

TREBLE（トレブル）コントロールを高い設定にすると、真空管内部でノイズを発生し、さらにそのノイズにフィードバックがかかる可能性があります。フィードバックという現象は超高音域が何度も増幅される事によって起こります。これは、CHANNEL 1（チャンネル1）のTOP BOOST（トップ・ブースト）モード、CHANNEL 2（チャンネル2）のHI 1 と HI 2 モードに於いてゲインを高く設定している時は、特に注意しなければなりません。

CHANNEL 1（チャンネル1）のTOP BOOST（トップ・ブースト）モード、CHANNEL 2（チャンネル2）のHI 1 と HI 2 モードに於いては、他のモードのときよりも、TREBLE（トレブル）の設定を若干低めに（１１時より下）して下さい（特にソロ・サウンド）。

BASS（バス）:

バスは、TA-30の中で最もシンプルなコントロールであり、操作はつまみを回して、プリアンプで音声信号の低音域をどのくらい強調するかを調整します。TREBLE（トレブル）ほど神経質になる事は無く、強くかけ過ぎない様に注意するだけで良いのです。他の高出力アンプと比べれば40Wモード以外TA-30の出力は小さいので、スピーカーを傷める可能性も低いと言えます。

１つだけ覚えておいて頂きたいのは、かけ過ぎるとアタック音がつぶれてしまい、他の楽器に埋もれてしまうという事です。GAIN（ゲイン）を上げたら、必ずBASS（バス）を絞る、これだけを守って頂ければ後は心配いりません。

CHANNEL 1（チャンネル1）のNORMAL（ノーマル）モード（TOP BOOSTも若干）、そしてCHANNEL 2（チャンネル2）のTWEED（ツイード）モードで、クリップ・サウンドを求めている場合は特に、BASS（バス）の設定が高くなり過ぎない様に注意して下さい。また、GAIN（ゲイン）が最大値になっている時も、注意が必要です。

REVERB（リバーブ）:

このロータリ・コントロールでREVERB（リバーブ）効果のミックスができ、真空管ドライブのアナログ・スプリング・リバーブを好みのリバーブの深さに調節することが出来ます。このコントロールがREVERBとEFFECTS LOOPのバイパスがOFFになって時のみ有効になります。リバーブ・コントロールを有効するにはフロントパネルの真ん中のプリアンプ/パワー・スイッチの近くにある各チャンネルの REV/LOOPミニ・トグル・スイッチをFX & REVに設定してください。

バックパネルにあるREVERB BYPASS（リバーブ・バイパス）ジャックにラッチ式のフットスイッチを接続するとフットスイッチでリバーブのON/OFF切り替えができます。フロントパネルのREV/LOOPトグル・スイッチがBYPASS（バイパス）に設定した場合フットスイッチが機能しませんので、ご注意ください。

ノート: リバーブ用のフットスイッチは近くのMESA/BOOGIE PRO SHOPで購入できます。MESA/BOOGIE PRO SHOPの情報はwww.mesaboogie.jpをご覧又は弊社サポート窓口までお問い合わせください。

ノート:リバーブ・バイパスフットスイッチには必ずシールド付きケーブルを使用してください。

フロントパネル: コントロールと特性（続き）:

FX & リバーブ / バイパス:

このミニ・トグル・スイッチでEFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）回路とアナログ真空管式のリバーブ回路を有効にします。ONにすると（スイッチを左側のFX & REVポジションにする）チャンネル 1 とチャンネル2の最終段のシグナル・パスが変更され、エフェクト・ループのSEND（センド）とRETURN（リターン）又はリバーブのセンド・リターンパスの真空管の回路がシグナル・パスに入ります。

一部のプレイヤーは気づかないかもしれませんがFX & REVとBYPASS（バイパス）の設定で音が若干変わります。殆どのアンプに比べると音の違いは小さくて、数えないほどの時間をかけた結果です。様々のギタリストの意見を聞いたら、真空管の低音と高音が少し強めに聞こえるようになり、音が3D感があり、殆どのプレイヤーがFX & REVをONにしたままTA-30を使用しています。

EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）のSENDとRETURNジャックがスイッチング式になっていますので、ジャックにプラグが入れていない時にループ回路が自動的に接続されます。

ノート：エフェクト・ループのSENDとRETURNをパッチ・ポイントとして使用できます。SEND端子をプリアンプ出力、RETURN端子をパワーアンプ入力として使用可能です。こういう用に使う場合、回路を"オープン"にする為に使用していない端子にダッミ・ケーブルを接続する必要があります。例えば、パワーアンプ入力としてご使用の場合は入力信号をRETURN端子に接続して、別のケーブルをSEND端子に接続します。SEND端子に入れたケーブルの二つ目のプラグは接続しません。

FX & REV回路をトグル・スイッチによるONに設定ときに、フットスイッチでSENDとRETURNジャックを回路に入れて、ループ回路がフットスイッチがOFFの時にもシグナルパスに入ったままです。こういう回路によって、ループがOFFになっている時にもリバーブが使用できます。チャンネル1で（得に40Wに設定した場合）LOOPとREVをONにした時にバックグラウンド・ノイズ（ハム）は若干大きく聞こえますが、その原因はチャンネル1のドライバーやパワーセクションのセンシティビティーです。

ディレイ・エフェクターやデジタル・リバーブを使用の際、フットスイッチ又はフロント・パネルにあるチャンネル選択スイッチででチャンネル切り替え行う"ポップ"ノイズは普通です。ディレイ・ミックスをWET（エフェクト効果が強い）に設定するほどポップノイズが大きくなります。得にチャンネル1のVOLUME（ボリューム）が大きく設定又はCUT/MASTERが引き出した時にノイズが発生しやすくなります。

そのノイズの原因はエフェクト・ループのバックグラウンド・ノイズと同じくマスター・ボリュームなしのビンテージ回路にあります。

フロントパネル: コントロールと特性（続き）:

カット:

CUT（カット）/ MASTER（マスター）つまみは、チャンネル1のみにあるもので、押した状態と引いた状態の２通りの機能を持っています。CUT（カット）は、つまみが押されている状態の機能であり、ハイ・カット・フィルターの周波数を設定します。この機能は他の機能と異なり、つまみを右に回すと、カットする周波数が下がっていきます。結果的に右に回せば回す程、音質は暗くなりこもっていきます。プレゼンス・コントロールと反対の効果があります。

このつまみを右に回しきるような事は滅多に無いでしょう。この機能は、単音のソロ・サウンドの音質がギラギラし過ぎているような場合に、それを和らげるような使い方が最適でしょう。

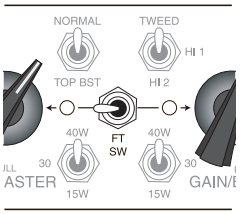
プル・マスター:

CUT（カット）/ MASTER（マスター）つまみを引いた状態です。このときつまみはマスター・ボリュームの役割を果たします。このつまみが MASTER（マスター）になっている時は、CUTは自動的に左絞りきりから1/3（１１時）位の値になります。そして、このつまみがMASTER（マスター）の間は、その値が保持されます。

TA-30は、伝統的なアンプと比べて、操作の自由度が飛躍的に拡大しています。伝統的なサウンドから現代的なサウンドまで様々なサウンドを網羅しています。操作の自由度という点では、フット・スイッチによるチャンネル切り替えもその１つでしょう。伝統的なアンプの良い所は、なんと言ってもオープンで、ダイナミックなサウンド・キャラクターと言えるでしょう。我々もその点について、異論はありません。その一方で、様々な要望に対する柔軟性という点ではどうでしょうか？我々は、伝統的なアンプの優れたサウンド・キャラクターを生かしつつ、操作に柔軟性を持たせる事を模索し、この機能を開発するに至ったのです。

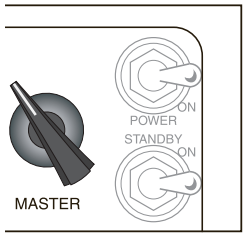
フロントパネル: コントロールと特性（続き）:

チャンネル選択:



フロント・パネル中央の３段切り替えトグル・スイッチで、チャンネルを切り替えます。このスイッチを真ん中（FT-SW）にすると、フット・スイッチでチャンネルを切り替えることができます。

マスター:チャンネル2

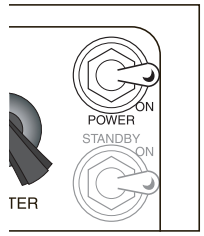


チャンネル2のマスターは、プリアンプの出力ボリュームをコントロールします。GAIN（ゲイン）コントロールでプリアンプの入力レベルを調整して、ドライブと歪みの量をコントロールした後、最終出力のボリュームをこのつまみで調整します。この２つのレベル・コントロールを組み合わせる事により、実にバラエティーに富んだサウンド・キャラクターを作り出す事が出来ます。

MASTER の設定にはこれが正しいといった値は特にありません。また、とても低い値や高い値にしてはいけないという理由も無いのです。大切な事は、チャンネル1の最終出力ボリュームとレベルを合わせるという事です。チャンネル2では、３種類のパワー・モードで、信じられない程バラエティーに富んだサウンド・キャラクターを生み出す事が出来ます。

ここに、既にお話ししたゲイン・ルールを適用したくなるかもしれませんが、ゲインとマスターに於いては、それは当てはまりません。ゲインを上げたらバスを下げるというゲイン・ルールは、あくまでもゲインとバスの関係に於いて適用されるものです。これは、低音域のアタックがつぶれて他の楽器に埋もれてしまう事を避ける為の基本的な事として理解しておいて下さい。

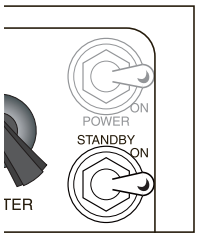
電源スイッチ:



これは、TA-30に電源を供給するためのスイッチです。電源のアースがとれている事を確認して下さい（これは、アンプのみならず、演奏者の安全の為にも重要な事です）。また、コンセントに適正な電圧が供給されている事を確認して下さい。

メモ: 電源ケーブルは、絶対に他のものを使用しないで下さい。アンプを損傷したり、火事の原因になる事があります。

スタンバイ:



このトグル・スイッチは大変重要な役割を担っています。このスイッチがスタンバイの位置にある時は、真空管はまだ準備段階で、ウォームアップをしています。電源を入れる時は、このスイッチがスタンバイの位置にある事を確認して下さい。

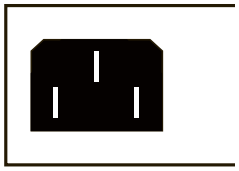
電源を入れてから、最低30秒の時間をおいてから、このスイッチをオンにする様にして下さい。そうする事で、真空管のトラブルを予防出来ますし、良い音で使用出来る期間が長くなります。

さあ、これでコントローラー、そして機能の説明は終了。いよいよ、あなたの出番です。あなたの、知識、感性、テクニックをフル動員して、思い切りTA-30にぶつけましょう。TA-30は、きっとあなたの期待に応えてくれる事でしょう。

バックパネル:

TransAtlantic TA-30 バックパネル

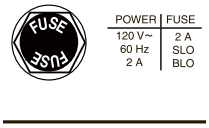
電源ソケット:



ヨーロッパ・スタイルの取り外し可能な電源コードをこのソケットに差し込みます。別売でより強力な電源コードも販売しています。アンプの電源を入れる前に、必ず電源コードがソケットにしっかり入っている事を確認して下さい。

メモ: 3 芯プラグの電源コードを他のものに変えないで下さい。

FUSE (フューズ):

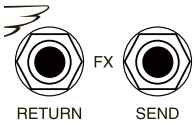


これは、メイン・ヒューズです。ヒューズは、外的要因による電源の過大入力からパワー管を保護する役割を担っています。ヒューズを交換する場合は、Slo-Bloタイプの同じ規格のものを使用して下さい。度々パワー管がショートしたり破損したりする場合は、ヒューズがとんでいる可能性が高いのでチェックして下さい。ON/STANDBY (スタンバイ) セクションの説明に従ってスタンバイ・スイッチをオンにしてもパワー管が正常な動作をしない場合は、即座にスタンバイ・スイッチをスタンバイに切り替えて、パワー管を交換し必要であればヒューズも一緒に交換して下さい。

スタンバイ・スイッチをオンにしても異常が見られないようであれば、真空管が一時的にショートしてヒューズがとんだ可能性があります。このような場合は安全の為に、隣の真空管、あるいは全ての真空管を交換してみるのも良いかもしれません。この場合、交換した真空管は予備として保管しておきましょう。また、ヒューズの予備は必需品です。

センド / リターン:

先に述べた通り、ワウやコンプレッサーとゲインに影響するエフェクター以外のエフェクターをこのエフェクト・ループに接続するのをお勧めします。ディレイやリバーブやコーラスなどをアンプの前に接続より、エフェクト・ループで使用するともっと良い音質が得られます。



エフェクト・ループにプロセッサーを接続する際には短い高品質のシールドのご使用をお勧めします。詳しくは本書の「フロントパネル:FX &リバーブ / バイパス」セクションをご覧ください。

接続方法:

外部プロセッサーの入力　=>TA-30 SEND (センド)　外部プロセッサーの出力　=>TA-30 RETURN (リターン)

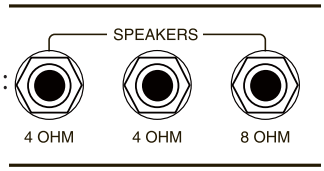
フロントパネルにある FX & REV /BYPASSスイッチが"FX & REV"に設定した時にTA-30のフットスイッチでSEND / RETURN ジャックガON/OFF切り替え可能です。フロントパネルスイッチがBYPASSに設定した場合、フットスイッチが機能しません。

ノート: センドをプリアンプ出力とリターンをパワーアンプ入力としての使い方に関しては本書の「フロントパネル:FX &リバーブ / バイパス」セクションをご覧ください。

バックパネル（続き）:

スピーカー:

このジャックはスピーカー・キャビネット、あるいはTA-30コンボのスピーカーに接続する出力端子です。８オームが１基と４オームが２基搭載されていますので、ほとんどの一般的な組み合わせには対応可能です。異なるインピーダンスのスピーカーを接続すると音が変わります。基本的には、アンプの出力インピーダンスとスピーカーのインピーダンスを合わせる様にして下さい。



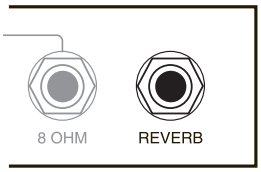
しかし、これを合わせない事でサウンドに変化を持たせる事が出来ます。例えば、８オームのスピーカーをアンプの８オーム出力端子に接続して、タイトで太いレスポンスを得ているとします。そこで、そのスピーカーを４オームの出力端子に接続すると、中域の減衰した、しなやかなサウンドになります。TA-30は、インピーダンスのミスマッチに対する許容が大きいので、このように様々な組み合わせにチャレンジして、新しいサウンドを見つけて下さい。

ノート: インピーダンスのミスマッチが低い方（例：４オームの出力に２オームのスピーカーを接続）にいくと、パワー管の寿命を縮める事になりますので気をつけて下さい。

コンボ: TA-30コンボは、８オームのスピーカーを１台、あるいは１６オームのスピーカーを２台（パラレル接続）使用していますので、どちらもインピーダンスは８オームになります。スピーカー・キャビネットを追加接続する場合は、８オームのスピーカー出力から外して、２台のスピーカー・キャビネットをそれぞれ４オームのジャックに接続すれば、マッチングのとれた状態になります。

ヘッド: TA-30ヘッドは、ほとんどのスピーカー・エンクロージャーに使用する事が出来ます。メサのキャビネットですと、1x12、2x12、4x12 を８オームで使用可能です。メサ以外のキャビネットを使用する場合は、１６オームのキャビネットであれば８オームの出力端子に接続して下さい。

リバーブ・バイパス・ジャック:



このジャックへフットスイッチ（別売り）を接続ことによってリバーブON/OFFの切り替えが可能になります。LOOPと同じくリバーブがずっとシグナル・パスに入って、ON/OFF切り替えでリバーブ・エフェクトがリターン・ミックス段でミュートされます。

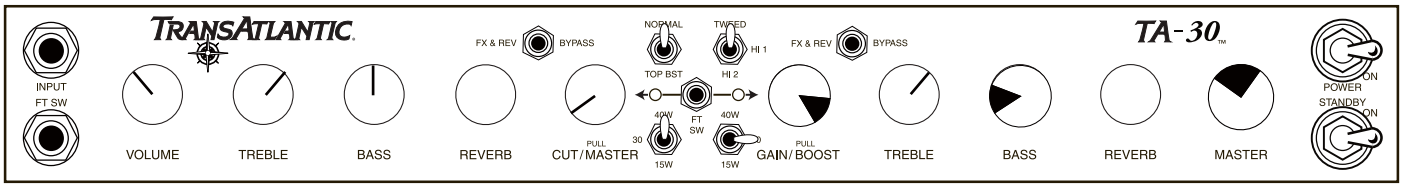
リバーブ用のフットスイッチは付属品ではありいませんが、お近くのMESA/BOOGIE PRO SHOPで購入できます。MESA/BOOGIE PRO SHOPの情報はwww.mesaboogie.jpをご覧又は弊社サポート窓口までお問い合わせください。ご注文の際必ずアンプモデルとTA-30用シールド付きフットスイッチを販売店に伝えてください。

ノート: リバーブ・バイパスフットスイッチには必ずシールド付きケーブルを使用してください。

これでTA-30の機能と操作に関する説明が一通り終了しました。あとは実際に音を出して感じてインスピレーションを広げて下さい。TA-30は、きっとそのお役に立つ事でしょう。ご不明なところがありましたら、弊社のカスタマー・サポート窓口にお問い合わせください。

サンプル・セッティング

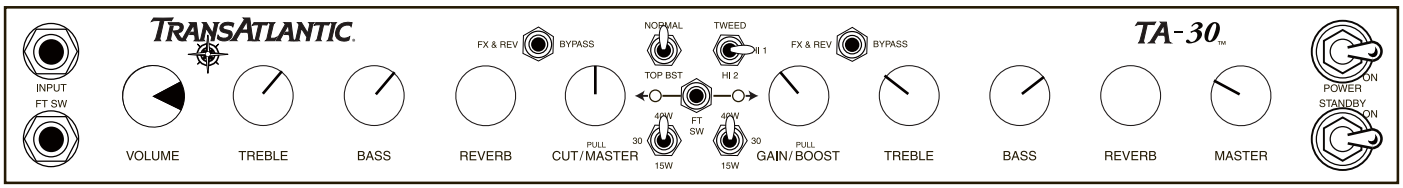
Spanky Clean / Blues Vibe



CUT
(knob pushed in)

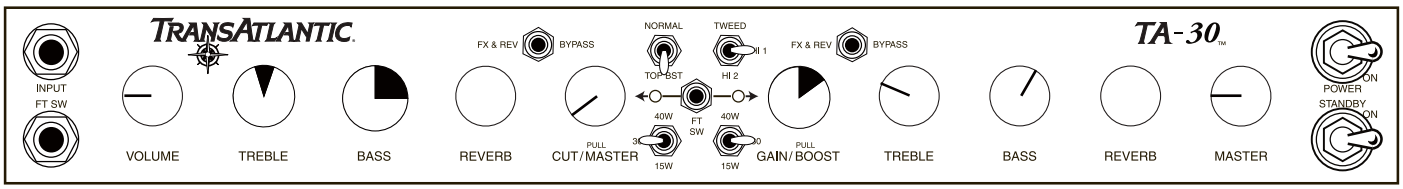
30W or 15W

Clean Punch / Brit Crunch



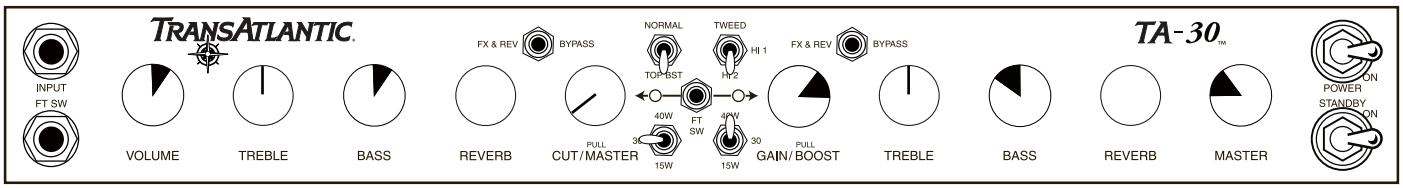
CUT
(knob pushed in)

Classic Brit Clean & Lead



CUT
(knob pushed in)

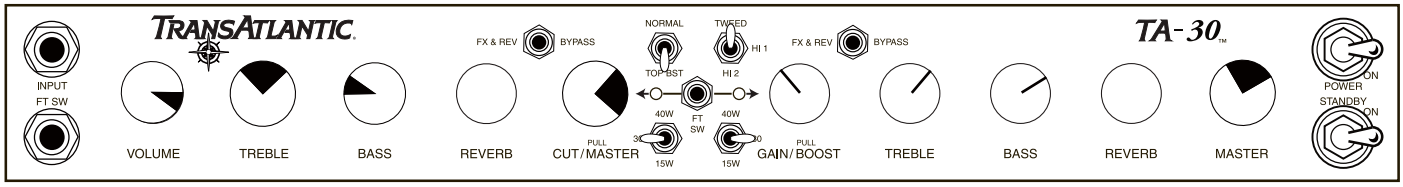
Brit Break Up / Boogie Lead



CUT
(knob pushed in)

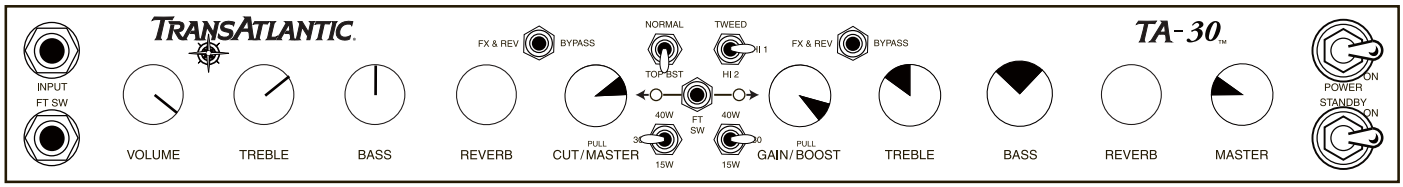
サンプル・セッティング

AC Solo / Vintage Clean



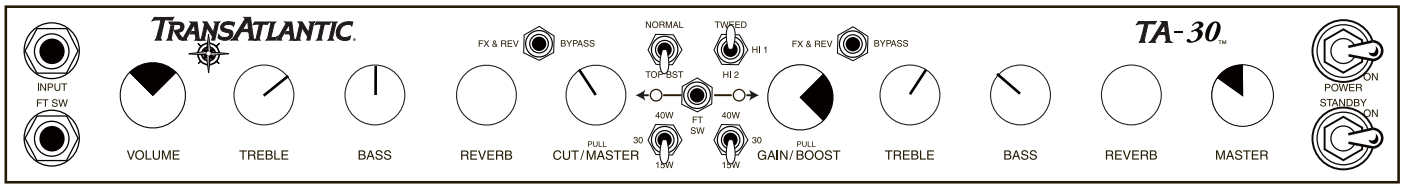
CUT (knob pushed in) **or** *Pull Master As Needed*

AC Grind / Saturated Brit



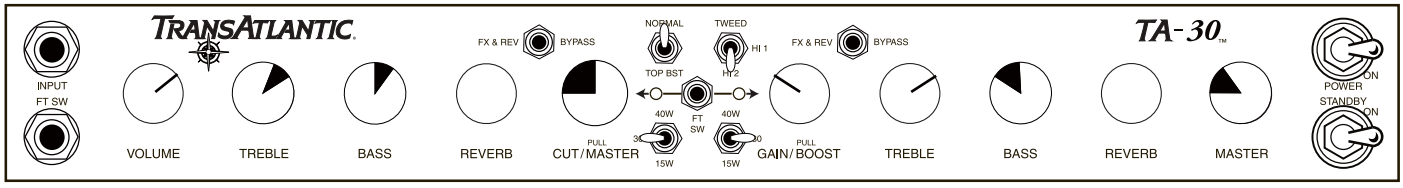
CUT (knob pushed in) **or** *Pull Master As Needed*

Old School Bright Grind / Fat Clip



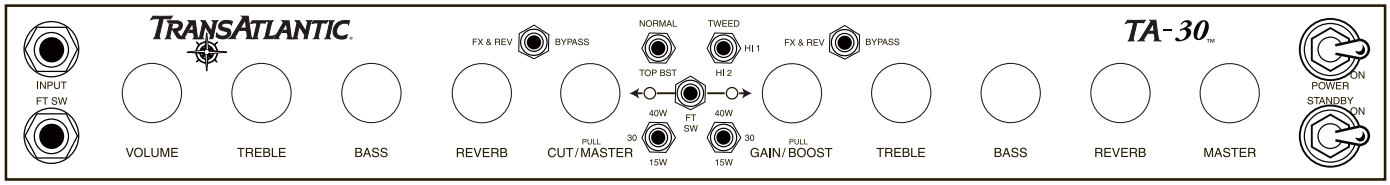
Pull Master As Needed (knob pulled out)

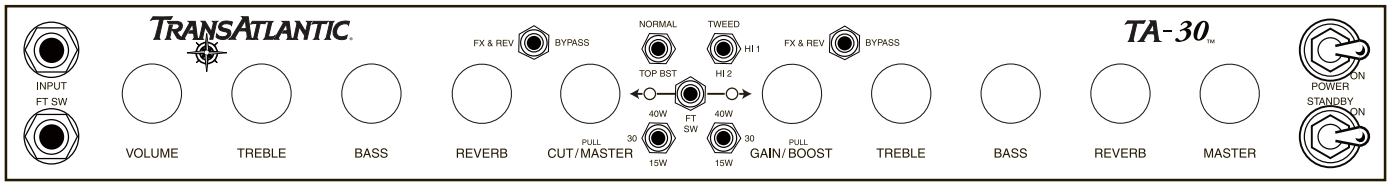
Bright Edgy Clean / Burning Boogie

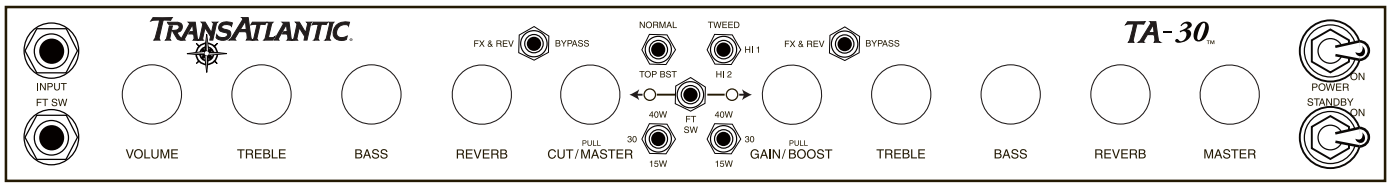


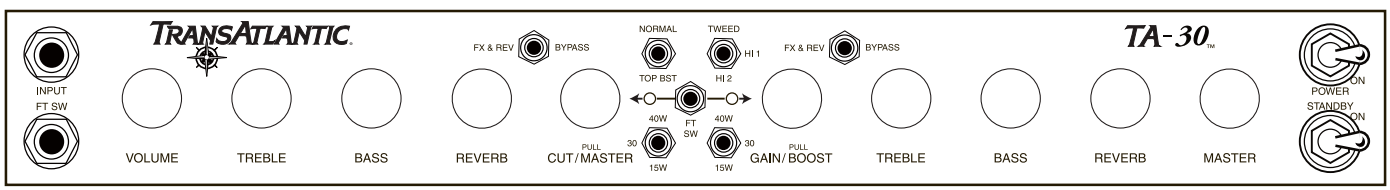
Pull Master As Needed (knob pulled out) *Pull Boost As Needed (knob pulled out)*

ユーザ・セッティング・テンプレート

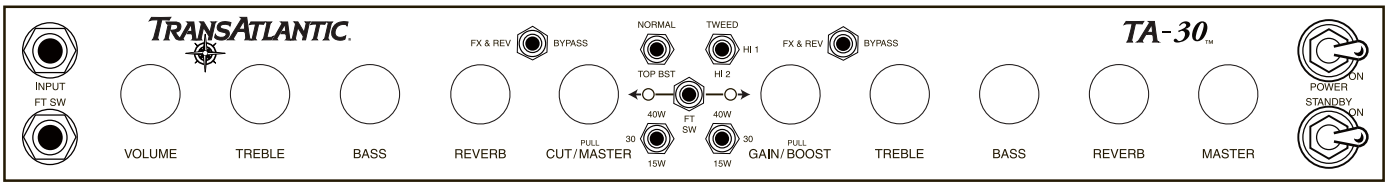


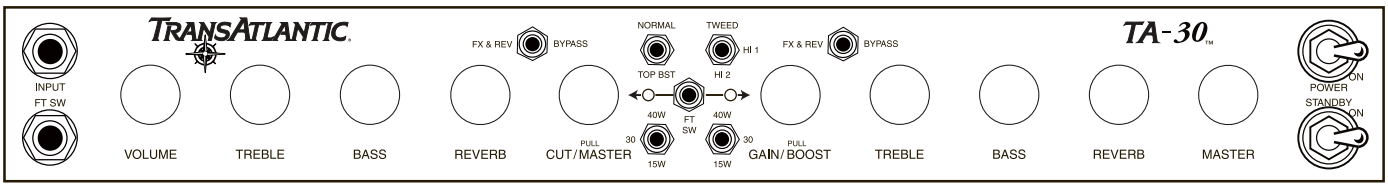


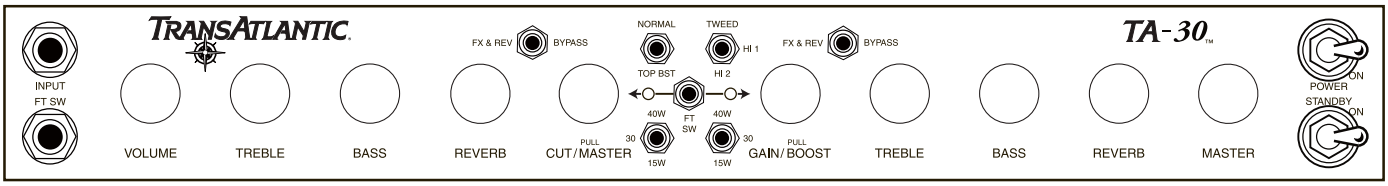


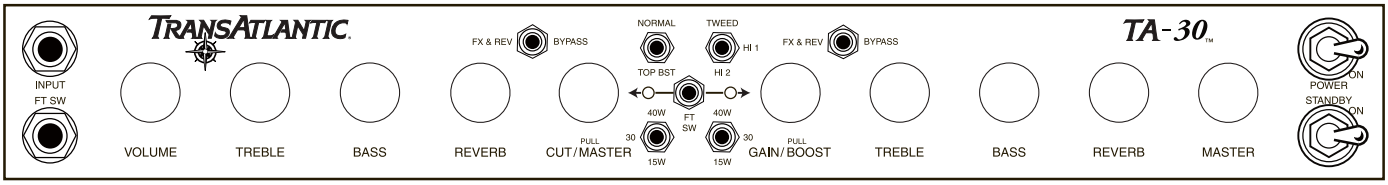


ユーザ・セッティング・テンプレート









スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、４オームと８オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、４オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。２オームを扱う事の出来る数少ないアンプ（例えばMESA（メサ）のBass 400+）であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値（例えば１６オーム等）の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

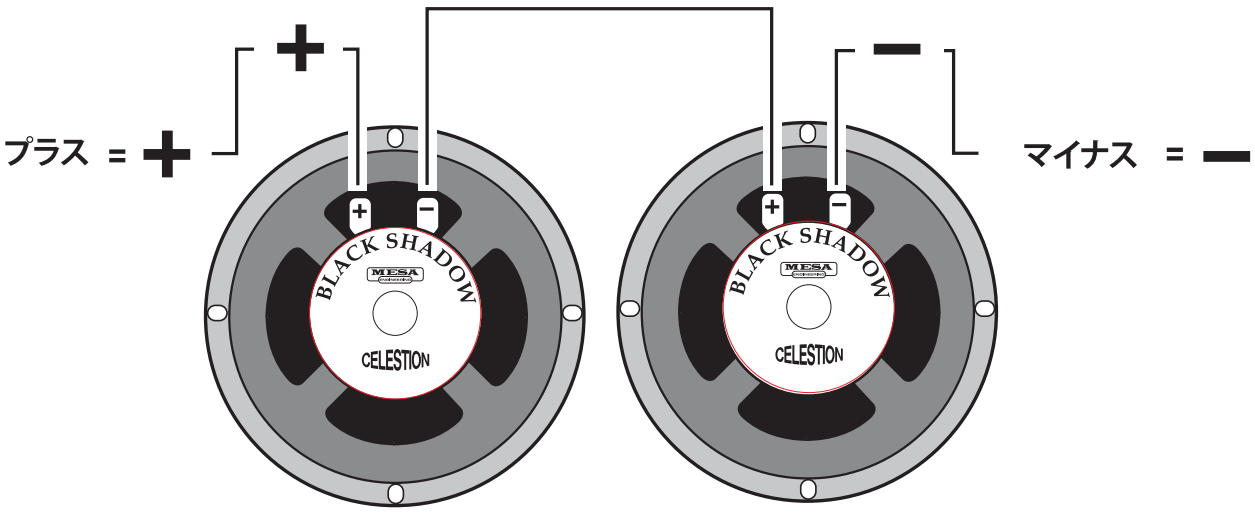
高い抵抗値（例えば８オーム出力を16オームのキャビネットに接続）でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の１つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが１台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の３種類になります。:

シリーズ（直列）:

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、８オームのスピーカーを２台直列に接続した場合は、16オームになります。



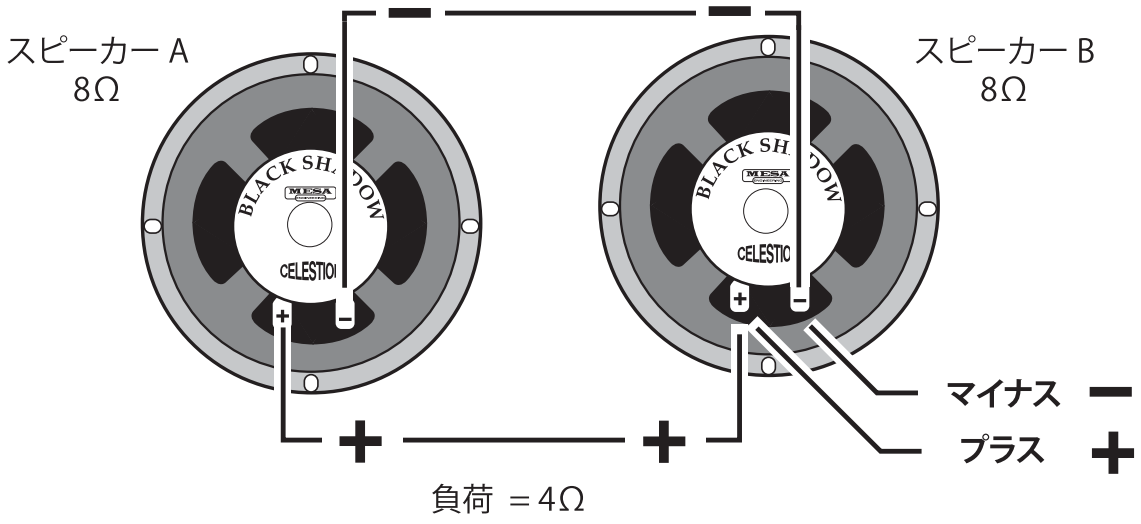
スピーカー A = 8Ω　　スピーカー B = 8Ω

シリーズ（直列）: スピーカーAのマイナス端子と
スピーカーBのプラス端子を接続

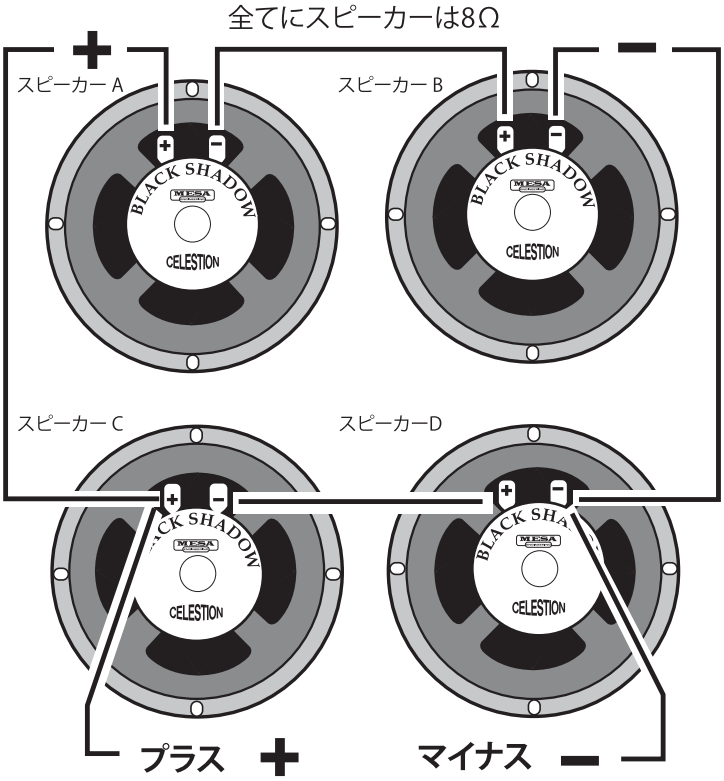
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド（続き）:

パラレル（並列）:

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。２台の８オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー（例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等）を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば８オームと４オームであれば、8×4÷（8+4）=2.6666オームになります。パラレル（並列）：スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ（直列）とパラレル（並列）の組み合わせ:



これは、２セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

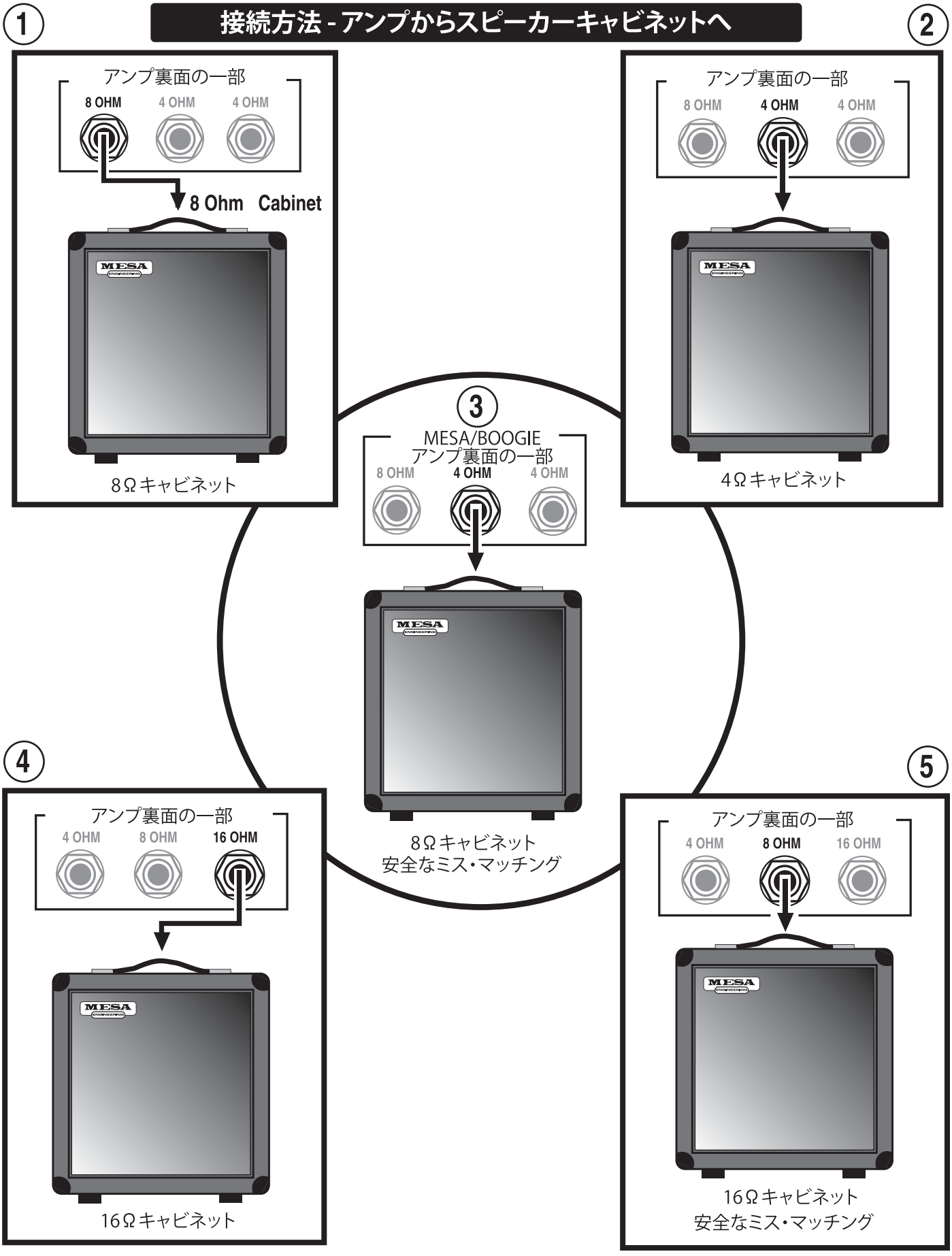
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

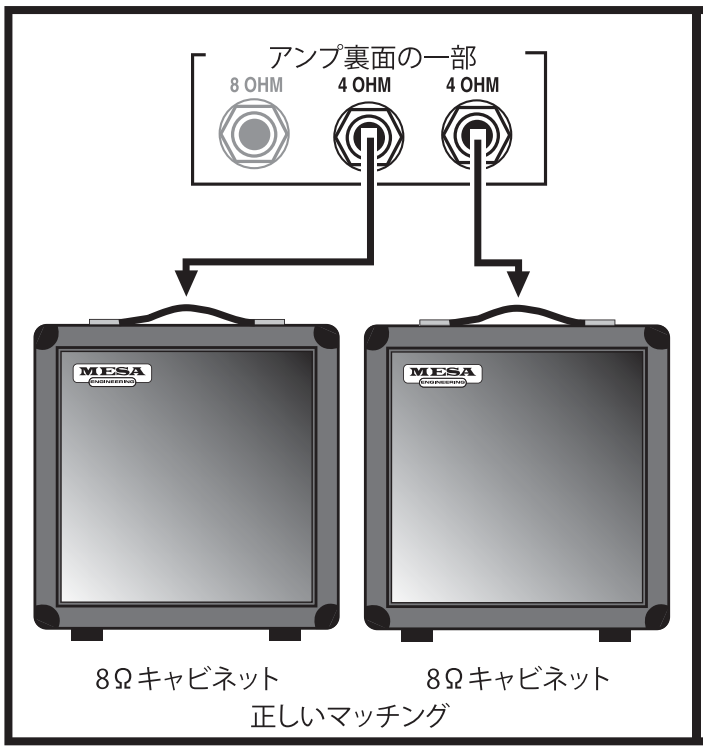
４台の８オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、８オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

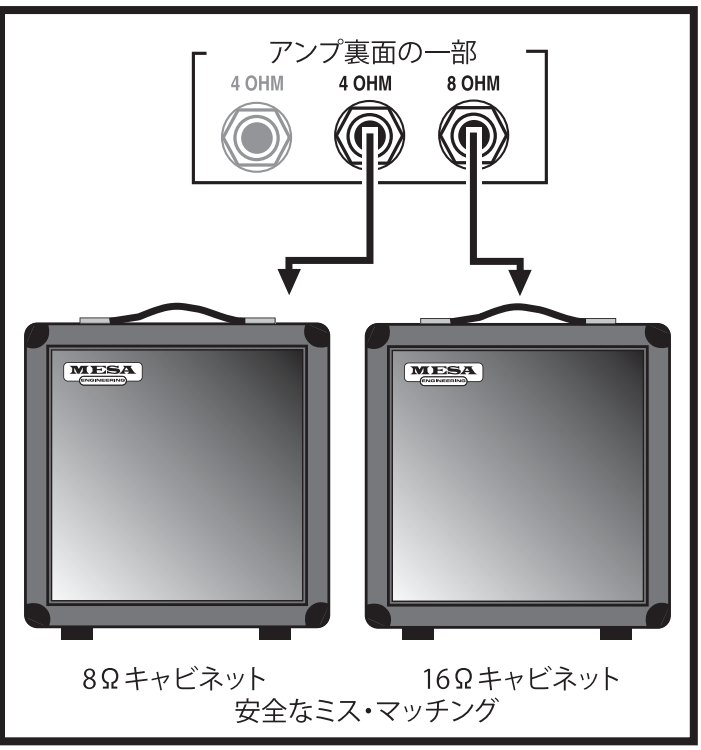


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

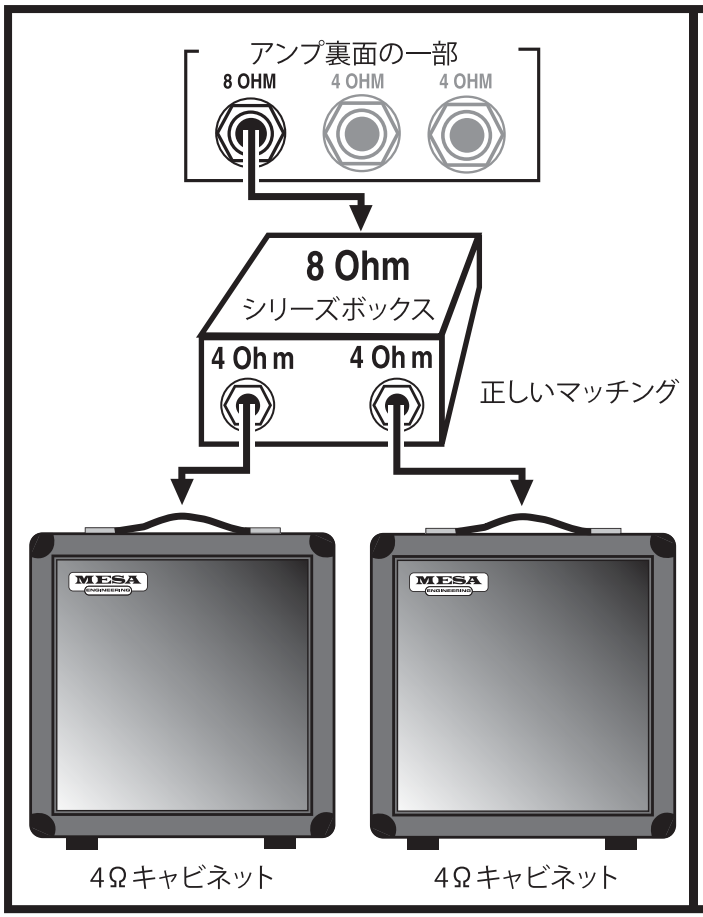
6



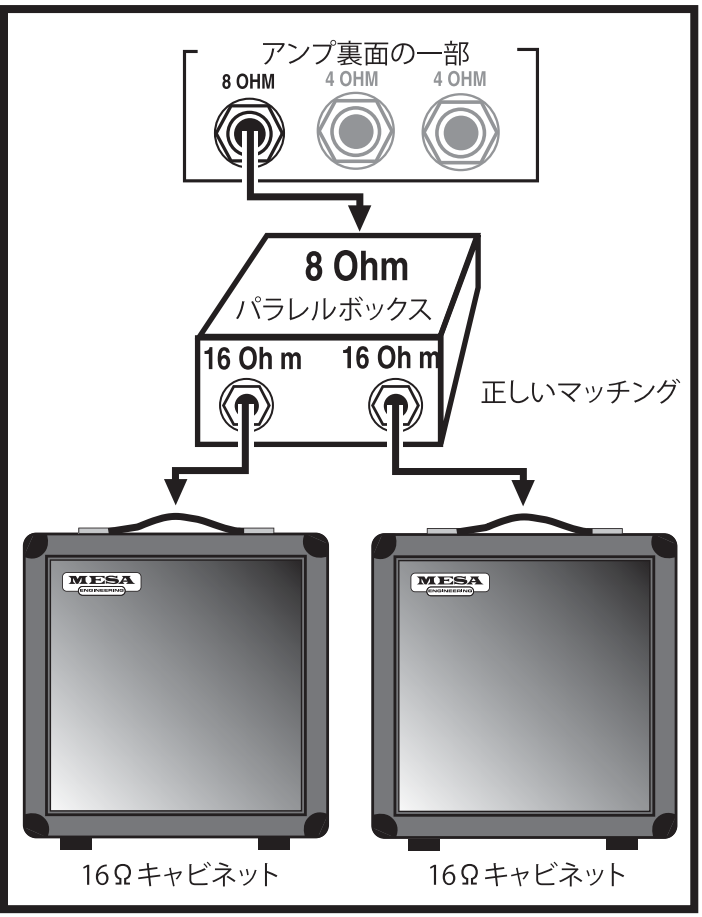
7



8

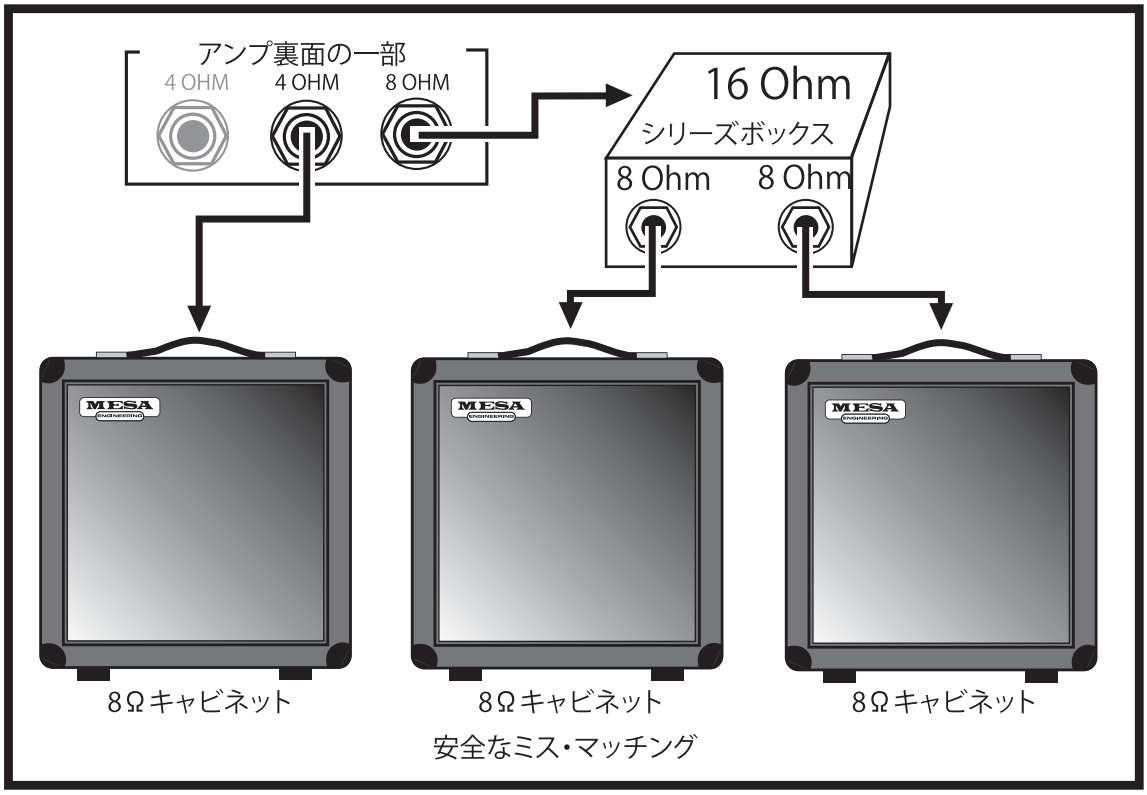


9

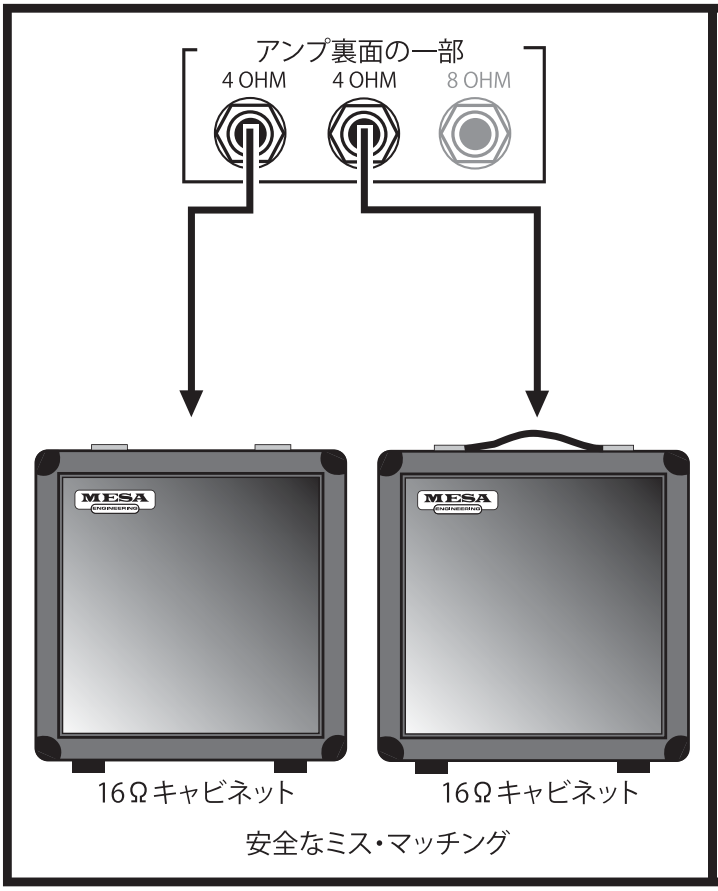


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

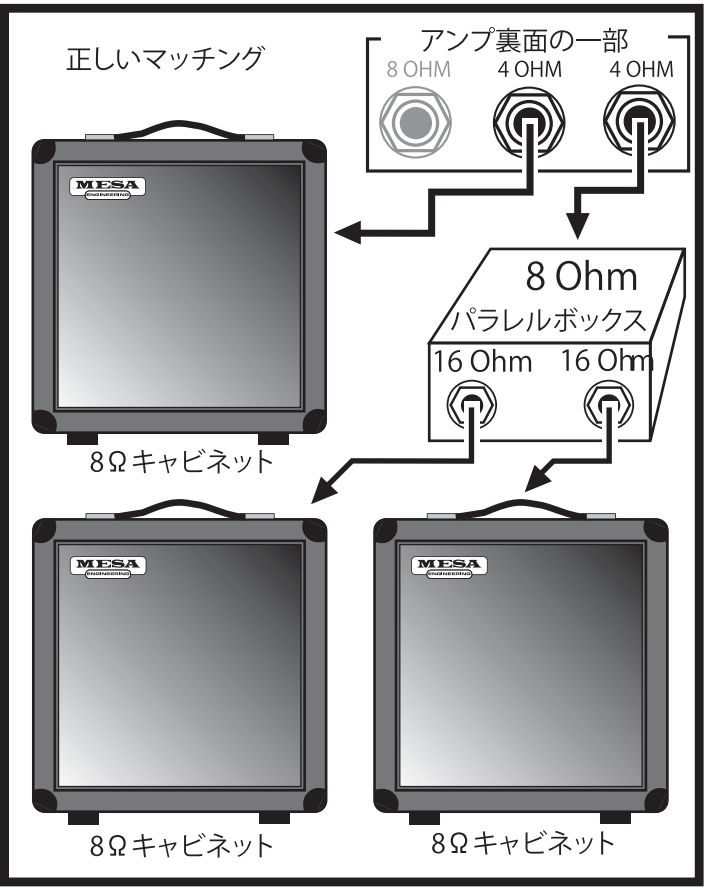
⑩



⑪

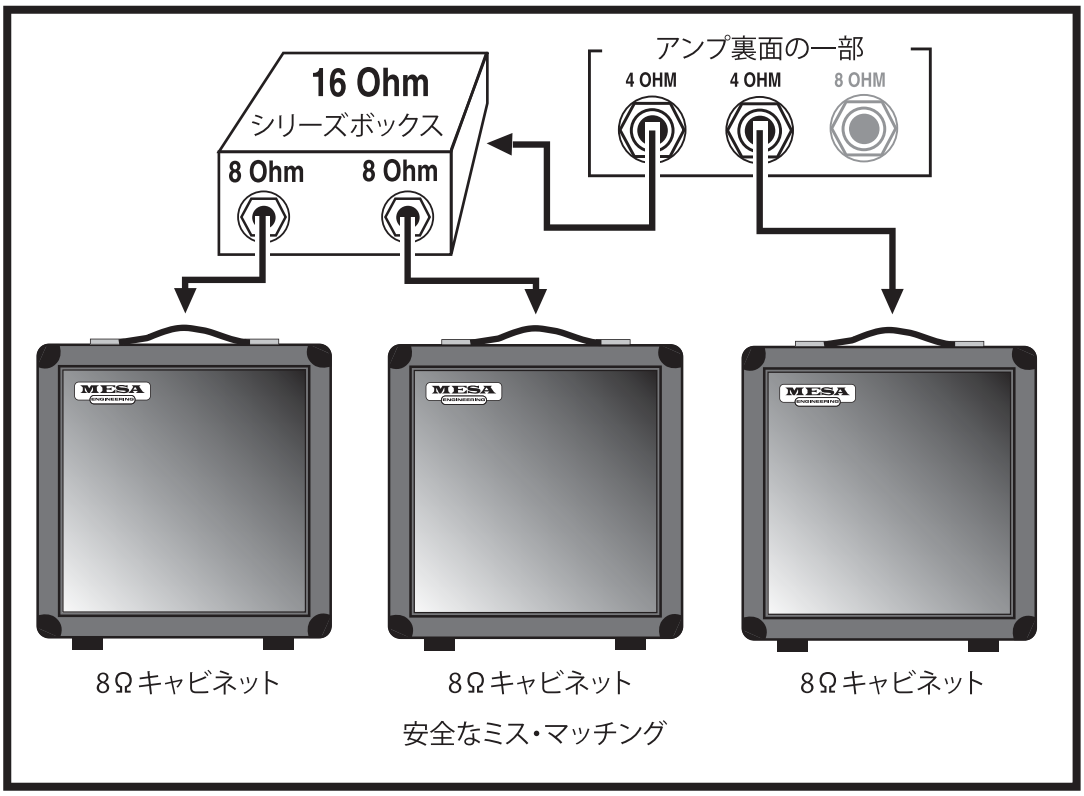


⑫

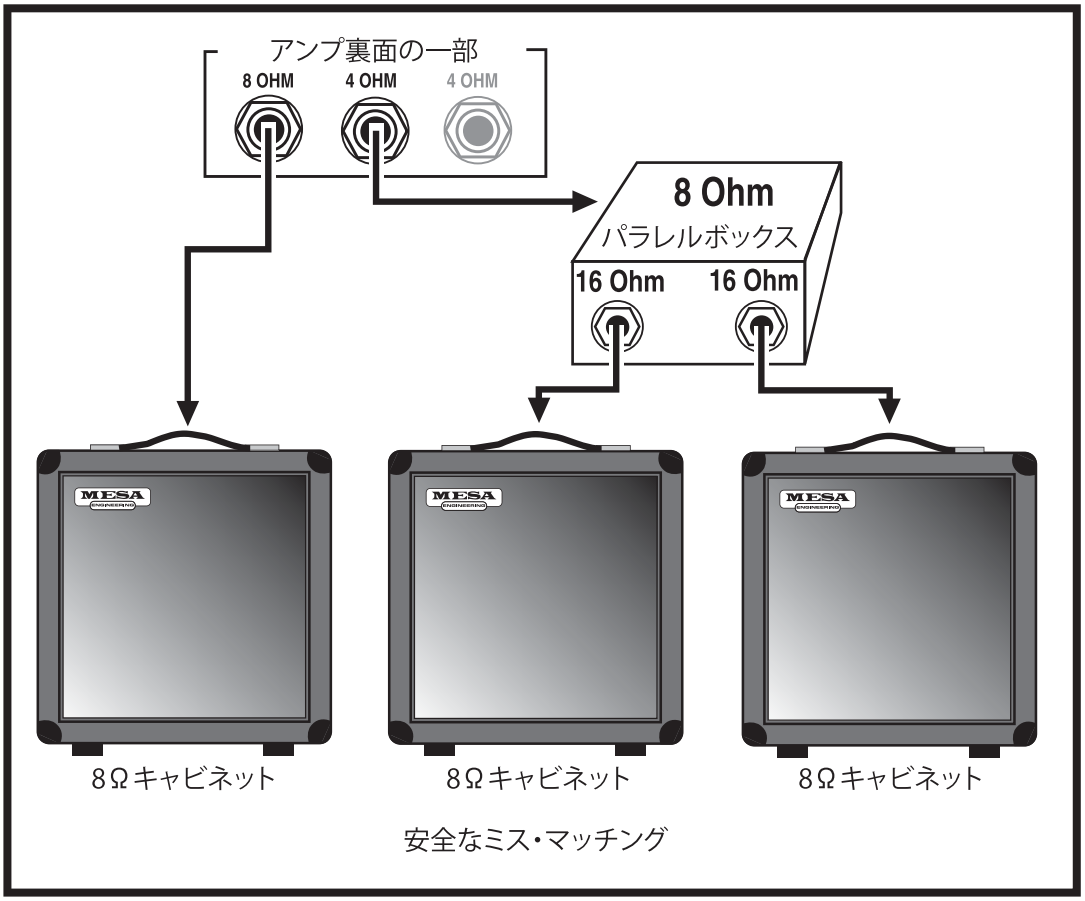


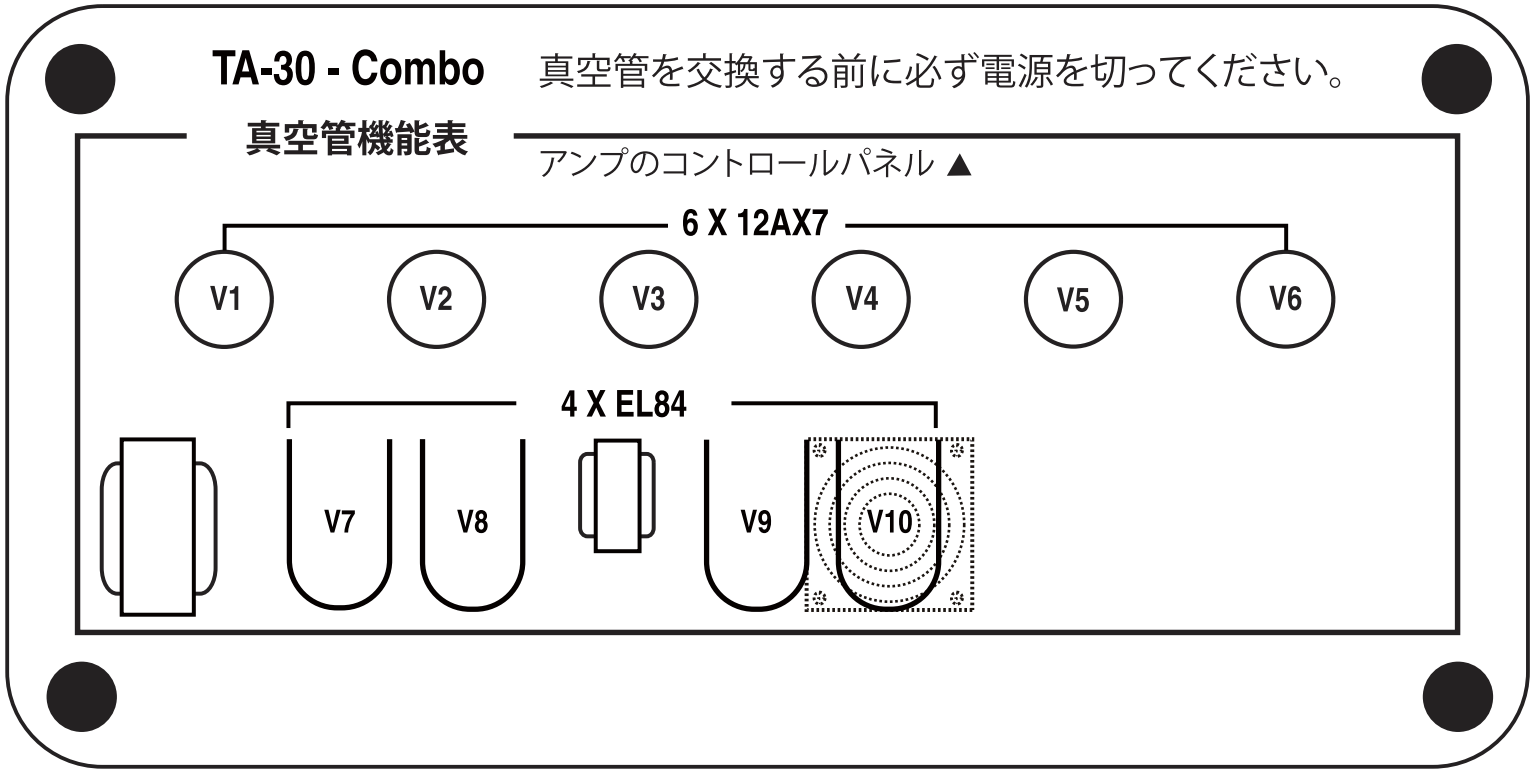
接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

⑬



⑭

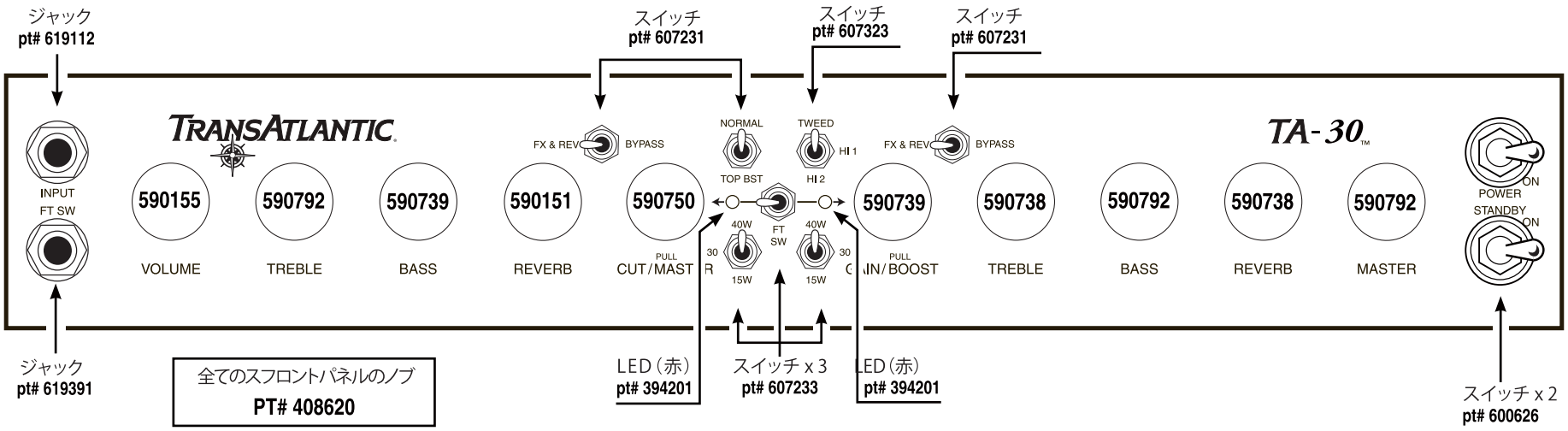




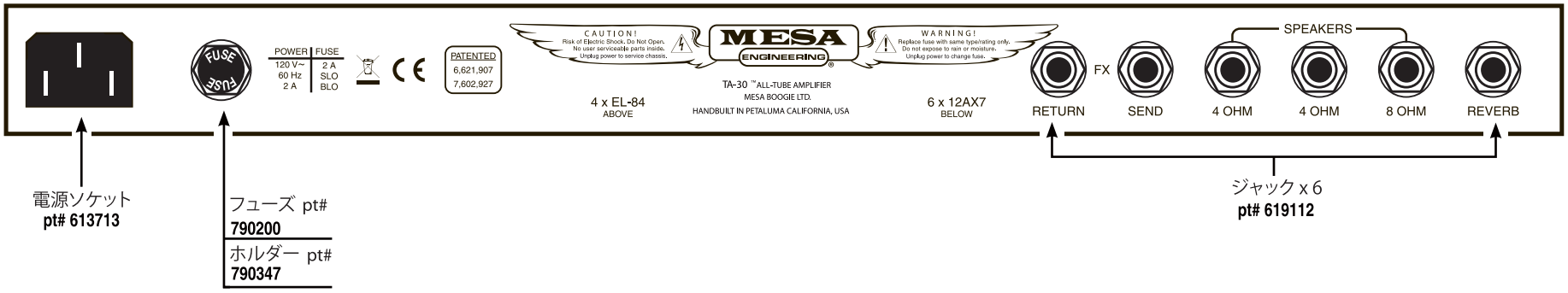
真空管（プリアンプ）
V1A&B - CH1入力段
V2A&B - CH2入力段 - CH2ゲイン第2段
V3A&B - CH1&CH2トーンコントロール ドライバー
V4A&B - ドライバー、フェーズインバーター
V5A - ドループ・リターン段 **V5B** - リバーブ・ミキサー
V6A - ドリバーブ・リターン段 **V6B** - ドリバーブ・センド段

真空管（パワーアンプ）
40 W = V7-V10
30 W = V7-V10
15 W = V8, V9

フロントパネル　TRANSATLANTIC TA-30



バックパネル　TRANSATLANTIC TA-30 Head



NOTES:

The Spirit of Art in Technology

MESA ENGINEERING

正規輸入代理店

株式会社　キョーリツコーポレーション

本社
〒468-0002 名古屋市天白区焼山1丁目813番地
カスタマーサポートセンター
TEL (03)5614-2081 FAX (03)5614-2166
support@kcmusic.jp